研究ノート

笠木透の人生と替え唄
── 笠木透の替え唄研究　その5 ──

鵜　野　祐　介

はじめに

フォーク歌手・笠木透が収集した、主に子どもたちによって歌い継がれてきた20世紀初頭以降の日本やアジア諸国の替え唄を、「資料紹介．笠木透の替え唄研究」としてこれまで4回にわたって本誌に連載してきた。編集作業の中で、笠木が替え唄に対してこんなに強い思い入れを抱くようになった背景を知りたいと思うようになった。筆者自身も含めて、子どもの頃、大人に聞かれたら眉を顰められそうな替え唄に関心を持つことはごく自然な心性であろう。だが笠木の場合、大人になってからもこれに関心を持ち続け、国内各地のみならず国外にまで足を運んで収集し、発表し、自らステージで歌うという活動を晩年まで行なった。これはきわめて稀有のことと思われる。その背景にあるものは何だろうか。

笠木は2014年12月、直腸癌のため77歳で逝去した。生前、筆者は残念ながら一度もお目にかかったことはなく、亡くなられる8ヶ月前から電話と手紙で数回にわたって行なった、筆者が編集委員を務める雑誌への原稿依頼[1)]のための事務的なやりとりのみであり、本格的な取材はできなかった。そこで本稿では、笠木が1983年から1998年にかけて出版したエッセイ集や対談集5冊[2)]、1995年から1999年にかけて出版したCDブックス3部作[3)]、2010年から2014年にかけて出版したCD文庫8部作[4)]に記した笠木自身の文章、さらに奥様の笠木由紀子氏と友人の増田康記氏の証言[5)]に基づいて、笠木の生涯を辿りながら、彼の人生における替え唄の意味について考えてみたい。

1. 替え唄を口ずさんだ「少国民」

1937年（昭和12）11月2日、笠木透は岐阜県恵那郡岩村町に生まれた。歳の離れた姉、妹との3人きょうだいで、父親は生糸の会社に勤めていたが、この年の9月21日に召集令状が来て25日に入隊、10月11日に上海に上陸していた（笠木1995:6）。「幼稚園の頃には、戦況は悪化、B29による空襲が始まった。灯火管制といって、夜になると、裸電球に黒い布をかぶせ、小さな丸い明かりの下で、息を詰めて暮らしていた。あのときの閉塞感と、おびえた、凍りついたような日々を忘れることはできない」（笠木2014：69）。

1944年4月、岩村町の国民学校（後の岩邑小学校）に入学。笠木は子どもの頃の替え唄とのかかわりを次のように記す。「当時、幼かったぼくらは少国民と呼ばれ、その少国民に、軍部や権力者たちは、軍人や軍隊へのあこがれをうえつけようと、たくさんの歌を作って、うたわせようとした。……あの頃、ぼくらは『大きくなって何になるの』と聞かれると男の子は『大将』で、女の子は『看護婦さん』と答えていたらしい。……たとえ他になりたいものがあっても、絶対に口にすることはな

かった。それを言ったが最後、『非国民』と指さされ、みんなの中へは入れてもらえないことは、火を見るよりも明らかだった。口をひらけば、たてまえでみんなが同じことを言う。これが戦争の実態だ」(笠木 1995:14)。笠木をはじめ「少国民」たちは皆、「僕は軍人大好きよ」「兵隊さんよありがとう」といった歌を繰り返し歌わされる中で、軍国少年、軍国少女になっていった。

けれどもその一方で、彼らは次のような替え唄を密かに口ずさんでいた。「ぼくは軍人大きらい／今に小さくなったなら／おっ母ちゃんに抱かれて　乳のんで／オナカの中へ消えちゃうよ……」。この替え唄について笠木は以下のように振り返る。「子どもたちには、戦争反対の考えや、軍国主義に反抗しようなどという意図も言葉もない。だが、替歌(ママ)を作る遊びとパワーはあったのです。この替歌（=「ぼくは軍人大きらい」…筆者注）も替歌のセオリーで、反対言葉にしてやれ、といった、ことば遊びから生れたものだろう。が、出来てみると、どこかで戦争はイヤだと思っている子どもたちの心にピタッと来るものがあって、全国のあちこちへ伝わっていったのに違いない。……戦争で逃げ場を失った、兵隊や子どもたちの、最後の逃げ場所は、お母さんのオナカの中に違いない。困ったとき、ぼくらは、そこに逃げこみたいのだ。そんなぼくらの中にある、ぼくらの本能と願望をこの替歌はハッキリさせている。遊びで作った替歌が、結果としてではあっても、あの戦争に生れた替歌の中でも、もっとも次元の高い反戦歌となってしまったことに、ぼくは大きな拍手を送りたい」(ibid.15)。

「湖畔の宿」の替え唄も笠木たち少国民の愛唱歌だった。「昨日生れたブタの子が／ハチに刺されて名誉の戦死／ブタの遺骨はいつ帰る／昨日の夜の朝帰る／ブタの母ちゃん悲しかろ……」。「ぼくら少国民は、この静かにヒットしていた恋の歌（=「湖畔の宿」…筆者注）を、戦争の悲惨さをうたう歌にしてしまったのですから、さすがです。権力は元歌は禁止したものの、この替歌が口から口へひろがっていくことだけは止めようがなかったのです。戦争も後半になると、ぼくらは、日の丸を持って、駅へ遺骨をむかえに行くことが多くなりました。元気いっぱい『行ってまいります』と出征していった兵隊さんが、白い布につつまれた、小さな白木の箱となって帰ってくるのです。そのうち、白木の箱には、石ころがひとつ入っていただけだそうな、とか、何も入っていなかったらしい、といったウワサ話が聞こえてきました。……この替歌を、意図して作ったもののように解釈し、これは出来すぎで、理が勝ちすぎているという人もいるけど、ぼくはそうは思わない。遊んでいたら、こんなものが出来てしまったのです」(ibid.19)。

「ぼくらは、あの暗黒の時代に、これらの替歌を歌うことで、自分をはげまし、心をいやしていたのです。戦争中の替歌など、低俗で下品で、単純で軟弱で、こんなものは芸術ではない、とおっしゃる人もいることでしょう。でも、あの時代、ぼくらにとってこれがうたであり、これが芸術だったのです。ほかに何があったのだろう」(ibid.22)。

「少国民」笠木透にとって替え唄は、人間としての本能と願望の表出であるとともに、自らを励まし心を癒してくれるものであり、かけがえのない「遊び」でもあった。

2. 生活綴方を反面教師として

1945 年 8 月 15 日、アジア太平洋戦争（十五年戦争）敗戦の日、笠木は国民学校の 2 年生だった。戦地から帰還してきた父親は、製糸会社のサラリーマン生活に戻ったが、戦場の後遺症を抱え、夜に

なるとうなされ、腰痛と胃腸病に悩まされる一方、休日や会社の終わった後には、畑仕事など家の用事もせずにテニスや弓道に出かけていた。そんな「自らの生を確かめたくて、遊ぶことに夢中になっている」父親と、「必死になって暮らしを支え、自らを犠牲にしてでも、子どもを守ろうとしていた」母親の間には喧嘩が絶えず、いさかいの間、笠木は小さな妹を連れて、家の外へ避難していたという。「怒声が止み、静かになって、もう終わったかな、と、そっと玄関の引戸をあける。『よかった』と思った瞬間に、また茶わんの割れる音がして、再びそっと戸を閉じて、涙いっぱいの妹を抱いていたときの悲しさは、いまでも忘れることができない」（笠木 1998：216-218）。

ところで、岩村町を含む岐阜県恵那地方は、戦後、「子どもたちが、自分や、まわりの社会を、ありのままに見つめ、自分のことばで、それを表現すること」（ibid.215）を求める「生活綴方」を中心に据えた教育実践で「恵那の教育」として全国的に知られている。新制の岩邑小学校 4 年生の笠木もまた「ありのままに書きなさい。そして、その問題がなぜ起きたのか、原因を考えなさい」と教師に要求され、それが大変な苦痛だったという。困った挙句、「ひとマスひとマスを、文字とも、記号ともつかぬ、マルや三角や、バツ印のようなものでうめつくしたノート」を提出したこともあった（ibid.218）。「綴方は、あったことが基本で、あったことしか書けないし、あったことを書くのだが、その、あったことを誇張したり、大胆にカットしたり、想像したり、ときには、エソラゴトや、ウソまでも書かなければ、真実が見えてこないこともあるのではないか。その一瞬の楽しさ、たまにしかない人間らしさを切りとって、それを書けば、あとのほとんどの時間が真暗闇でも、希望が持てる。人間は、どんなに厳しいときでも、明るさを見ているのだ。それが生きていく力なのだろう。希望を抱くためには、ウソや、エソラゴトも必要なのだ」（ibid.220-221）。

その一方で、自分の生活を自分のことばで表現することを基本姿勢とする自身のフォーク・ソング作りの土台が、生活綴方教育にあったことを笠木は認めている。「書けなくても、綴方で育ったのだ。自分を表現することの大切さを教えてもらっていたから、フォーク・ソングが直感で分かったのです。綴方教育の土壌があったから、その方法と精神は、いつの間にか、ぼくの中で定着し、育っていったのだろう」（ibid.223）。

笠木のコンサートの中では、憲法や平和や環境の問題を自身の生活と結びつけストレートに表現した硬派の歌がうたわれる一方で、いつも替え唄や春歌が重要なレパートリーとして組み込まれていた。それはおそらく、現実をひっくり返すことで生まれる楽しさや明るさを内包する替え唄の価値や、生きる姿勢における硬軟のバランス感覚を、反面教師としての生活綴方を通して、笠木が身につけていたからに違いない[6)]。

3. 学生運動への情熱と「心に沁みるうた」

岐阜県立岩村高等学校に進学した笠木は、同校のバンカラとアカデミズムの校風と、同級生からのマルキシズムの洗礼によって、新聞部を拠点に勉強をそっちのけで校内改革や社会的活動に奔走する。義兄（姉の夫）の近藤武典が教員だったことなどの影響により、教員を目指して岐阜大学学芸学部に入学するが、1 年の時に自治会の副委員長になったのを手始めに、砂川闘争、任命制教育委員会や勤務評定への反対闘争、60 年安保闘争と、学生運動に情熱を注ぎ、疾風怒涛の高校･大学時代、留年も含めた 8 年間を過ごす。

替え唄とは最も縁遠いように思われるこの期間であるが、替え唄の本質にもかかわる２つの歌との出会いがあった。１つ目の出会いは、大学１年の秋、東京都砂川町におけるアメリカ空軍の基地拡張に反対して農民と労働者と学生が一緒になって闘った、いわゆる「砂川闘争」に参加した時のこと。強制測量をさせようとする機動隊と、阻止しようとする笠木たち反対同盟側が芋畑を踏み潰しての激しい攻防を行なった末、強制測量が始まり、機動隊に守られて杭が打たれるのを、反対同盟側はスクラムを組んだまま凝視していた。その時、どこからともなく歌が口ずさまれる。「*夕焼け小焼けの赤とんぼ　おわれて見たのはいつの日か*……。ぼくらは泣いていた。農民も労働者も学生も、ドロにまみれ、汗と涙でくしゃくしゃになった顔をふくこともせず、腕を組んだまま泣きながらうたった。……あの歌しかなかったのか。農民も労働者も学生も一緒にうたえる歌は、ほかにないのか。闘いの歌や、労働歌はいっぱいあるのに、闘いに破(ママ)れたときにうたう歌はないのか」（笠木 1985a：73-74）。

２つ目のうたは、大学２年の夏、後に映画「あゝ野麦峠」で有名になった岐阜県高根村の野麦郷で、地元の青年たちに何とか打ち解けてもらおうと歌った「お月さん今晩は」という歌謡曲。*こんな寂しい田舎の村で　若い心をもやして来たに／可愛いあの娘は　おらを見捨てて／都へ行っちゃった　リンゴ畑のお月さん今晩は／うわさをきいたら　おしえておくれよな*……。この歌のおかげで、話のきっかけが生まれ、座がなごんで来た。「学生運動の歌なんぞ、なんの役にも立たなかった」（ibid.64）。

２つの歌との出会いは、年齢や職種や立場を超えて、その場に集まった皆の心を一つにつなぎ、安らぎや慰めを与えてくれるような「心に沁みるうた（歌・唄）」を探し求める彼の旅路のきっかけとなった。そしてアメリカの数多くのフォーク・ソングが、既存のメロディーにアドリブで詞をつけて生まれた一種の替え唄であったように、替え唄には一緒に歌う人びとの心をつなぎ、安らぎや慰めを与える力を持っていることを、笠木は予感していたのかもしれない。

4. フォーク・ソングとの出会い

大学卒業後、天職とも感じていた教職に就こうと志願するが、学生運動の活動家であった前歴が災いしてか、正規採用はされなかった。しかし、結核の療養のため病院に通いながら、地元岩村町の小学校に臨時教員として２年間勤務し、自由奔放な教育実践を行う。「たとえばなるべく教科書はやらないとか、一日かかってソリを作り、次の日はそれを持って一日山へ遊びに行くとかそんなことばかりやっていました。今でも“語り草”なのは、日刊新聞を子どもたちと作ったことです。クラスを四つにわけて四つの新聞社を作りそれが毎日交代して新聞を作るんです」（笠木 1983：18）。

正規教員の採用試験を「幾度受けても受からなかった」こともあり、病気の方もストマイ、パスといった抗生物質の薬剤のおかげで快復したことから、1963 年に上京し、教育関係の出版社に就職する。しかし、高額の事典や図鑑のセールスを業務とする生活に、２か月後には「おれはこの会社にはおれんぞ」という気がしてくる（ibid.20）。そこで翌 1964 年、教員をしている妻が暮し（笠木は学生結婚していた）、両親も引っ越してきていた中津川市で、この出版社の代理店を父親と一緒に始める。「中津川なら同期の先生から先輩から親戚から教員の顔はいくらでもあるわけで、学校相手だから夏休みも冬休みもあるし、半日働けばそう仕事量もあらへんし競争相手もそうあらへんし、半分

は仕事、半分は遊び、というまことに体質に合った生活になりました」(ibid.24)。

中津川には教員の義兄・近藤武典がおり、前年10月に前身の「中津川労芸（勤労者芸術協議会)」を発展解消して「中津川労音（勤労者音楽協議会)」を発足させ、その中心メンバーとして活動していた。近藤に「おまえ、昼間ひまだし手伝わんか」と声をかけられ、労音の手伝いをするようになる。「ひじょうに消極的なひとりの会員にすぎ」ず、「たまたまひまやから」(ibid.25）というぐらいだった笠木が、「音楽をやらないかんと思い始めた」きっかけは、1966年7月17－18日に名古屋市公会堂で行われた中部労音合同例会のベトナム中央歌舞団公演を観たことだったという[7)]。

それはぶったまげたのです。なぜベトナム歌舞団で感動したかというと、それは『戦争してるのに歌を作っている』という事実でした。要するに、中身も良かったのだけど、むこうの姉ちゃんがしゃべっているのを通訳を通して聞いていると、彼女のうたった歌は半年ばかり前に遊撃隊が作った歌や、というわけです。それを私たち歌舞団が習っていま歌っておる、と。その遊撃隊は昼間は田んぼで百姓やっとって、飛行機がとんで来たらパァーッと撃って、行っちゃうと昼めし食って歌を作ったりするというのです。

考えてみれば日本の第二次大戦も「ほしがりません勝つまでは」で、戦争のためすべてを犠牲にして闘って負けた。おれの安保闘争も献身的に活動ばっかりやって負けた。ベトナムは、めしを食っとるのか遊んどるのか、働いとるのか鉄砲うっとるのか、下手すると戦争しているのか遊んでいるのかわけわからんような戦争をやっとる、えらいもんやな、と思った。こんな戦争の仕方があるんだということを初めて知るわけです。ベトナム歌舞団の歌や話を聞きながらぼくは変わっていくのです。革命にしても戦争にしても生きるか死ぬかだから、すべてを犠牲にしてやるもんだと、それまでぼくは固く信じていました。『本当に人間が闘いをしていくんだったら、ああ、こうやらにゃあかんのじゃないか』とそこんとこでひらめいたのです。しかも何年かたってああいうやりかたでベトナムは勝利して行くのです。

ぼくはずっと歌とか音楽とか芸術とかを無視して来た。社会科学の勉強とか思想とかポリシーのことばっかりで、観念だけを変えようとして来て、感性の方はむしろ必要ないくらいに思っていたことに気づきました。安保闘争に負けた後スランプにおちいったのはここのところではないかと。人間に理性・知性の部分しか見ず、感性の部分をまったく欠落させて考えていた。そのあやまちに、やっと、気がつくわけです。おれは今まで人間を不遜にも頭だけが変わればいいと思って革命を語り、「核」を語り、観念だけで運動をやってきた。これではスランプにおちいるはずだとやっと納得できたわけです。これはいかなんだ。われわれの安保闘争はあれでは勝つはずがないと。それからなんです。それじゃおれも歌をやってみたい、作ってみたいと思うようになったのは（ibid.25-27)。

ベトナム中央歌舞団公演の直後に発行されたと思われる「中津川労音」1966年8月号（No.27）の扉頁に匿名のコラム「フォーク・ソング」が掲載されている[8)]。

フォーク・ソングの良さ、魅力はどこにあるのだろう。何か話しかけるような、何か心に訴えかけてくるような、そんな感じがする歌……わたしたちの生活の中から生まれた感情を、どちらかといえば平穏な、だけど美しいメロディーにのせて口ずさむように歌う……しずかにギターを

かなでながら……歌われている内容がどんなに激しく、悲しく、切ないものであっても、それらの感情がむきだしにならず、素直に又、素朴さを失わず淡々と流れだすメロディー。

フォーク・ソングにもいろいろな種類があります。生まれた土地によっても違います。歌の内容によっても分けられます。今、私たちが聞こうとしているのは社会的なフォーク・ソングとでもいうのでしょうか。さかんに「乱れちゃっている」とか「世の中は間違っとる」とかいう言葉を聞きますが、こういうことを歌っていく。つまりピート・シーガー、ジョン（ママ）バエス、ピーター・ポール・マリーのような歌手たちによって歌われる歌、「平和の誓い」「雨に何をしたの」「風に吹かれて」などです。又、悲しいまでに切ない別れの恋歌「五百マイル」。その他「ドナドナ」「コットン・フィールズ」などたくさんあります。私たちの感情を豊かにすることは幸せなことです。自分の「想い」を歌いましょう。

憶測の域を出ないが、この文章は笠木の手によるものではないだろうか。もしそうであるなら、彼の「フォーク・ソング」観がここに集約されていると言えるだろう。

同じ1966年、近藤や吉村和彦など中津川の「綴方教師」でもある労音の活動家と一緒に、笠木は文工隊劇団「ぜんまい座」を結成する一方、同年の冬、中津川周辺の民謡の調査を始める。その中で、恵那郡坂下町のおばあちゃんやおじいちゃんたちから、彼らの記憶の底に眠っていた盆踊り唄「音頭与三郎」を聞き出し、最終的に140番まで集める。そしてこの唄をぜんまい座公演のレパートリーのひとつとして歌い始めるとともに、近くの村に「うるし原太鼓」の調査に行って打ち方を習い、これもレパートリーに加えていく。

翌1967年10月、笠木は名古屋市公会堂でピート・シーガーのコンサートを聴く[9]。この時のことを笠木は、亡くなる半年前の2014年6月、次のように回想している[10]。

私はといえば、1961年、60年安保闘争に負けて、なぜ負けたのか分からず、混乱と動揺に揺さぶられていた。さらに結核となり、明日は見えず、ボロボロになって、長良川の河原にねそべっていた。私の学生運動の終焉だった。歌をうたう気にもならなかった。

アメリカのフォーク（ママ）ソングのことなど何も知らなかった。アメリカも歌もどうでもよかったのだが、6年後に中津川労音に入り、1967年に名古屋市公会堂でピート・シーガーさんのコンサートをきくはめになる。私のフォークソングの始まりであった。

同じ1967年の11月、高石ともやを中津川に招いてコンサートを開催。その前座としてぜんまい座が「音頭与三郎」を歌う。一方、高石は「ぼくはギターはへただけど、これはアメリカのある名もない人が作った歌です。すばらしい歌でしょう」といいながらピート・シーガーやマルビナ・レイノルズを歌い、笠木と高石は意気投合する（笠木1983:36）。このようにして、1966年から1967年にかけてが、彼の人生のターニングポイントとなった。「フォーク・ソング」が彼の生活の基軸に据えられたのである。

この時以来、笠木と高石とのほぼ半世紀にわたるつき合いが始まるわけだが、本稿の主題に関連するエピソードを一つ挙げておきたい。1968年、全国労音が高石ともやに対して、前年には200ステージを委嘱していたにもかかわらず、自らの主催公演から削除したのだが、その理由が、高石がベ平連[11]とつきあっているとか、新左翼の学生とつきあっているとかと並んで、彼が春歌を歌うこ

とだった。

「そういうのをやめてくれればステージはたくさん作りますよ。どうですか」というのに対してともや君は「春歌を歌ってはいけないなんてことは困る。ぼくは歌いたい歌をやりたいんです」ということで両者は決裂し、労音の例会がみごとにゼロになってしまうのです（ibid.37）。

笠木は全国労音に対して激怒し、中津川労音だけは高石を支援し続けると全国の総会で宣言する。それがきっかけとなり、「全国労音」に対する抵抗の証しとしての「全日本フォーク・ジャンボリー」（別名「中津川フォーク・ジャンボリー」）を、笠木が中心となって1969年から1971年まで毎年8月、3回にわたって開催することになるのだが、このエピソードには春歌や替え唄に対する高石や笠木の姿勢が垣間見え、興味深い。

5. フィールド・フォークの展開

1969年8月9日夕刻から10日朝にかけて、「全日本フォーク・ジャンボリー」は岐阜県恵那郡（現在の中津川市）坂下町椛の湖畔の原野を特設会場として開催された。この会場は、満州開拓団に役場の職員として同行した体験を持つ、当時坂下町町長だった吉村新六が「なにかよう分からんけど、若いものが自力でやると言うのなら、貸してやろう」と応援に乗り出してくれて見つけたもので、「灌木と雑草のほかは何も生えていないでこぼこの原野であり、人家も電信棒も水場もない、すべて一からはじめるよりない、すばらしい土地」だった（笠木1985a：85）。

ステージや客席のみならずトイレの設営にいたるまで笠木たちと地元の青年有志が準備を進めて当日を迎えた。夕方6時ごろからコンサートは始まった。雨天の中、日付が変わる頃まではアマチュア団体の演奏で、深夜零時を過ぎてからプロが登場した。五つの赤い風船、高石友也、高田渡、と続き、翌朝9時に迎えたフィナーレの曲は、岡林信康の「友よ」だった。全国から集まった2500人の観客全員が「*友よ　夜明け前の闇の中で／友よ　闘いの炎を燃やせ*」と歌った。

翌1970年、1971年と3回にわたって開催された「全日本フォーク・ジャンボリー」は、日本のフォーク・ソング史上の語り草とされる。特に第3回は3日間の大イベントで全国から3万人以上が集まり、3日目にステージ占拠の大混乱が起こる。

この3日間の動きをくわしく書けば、日本のフォーク・ソングの草創期の姿がうかびあがって来るのだが、それはまたいつか書くことにして、まだ始まったばかりのフォーク・ソングが、あっという間にブームとなり、風俗化し、商業化していく。そのきっかけを、このフォーク・ジャンボリーが作ってしまったのだから、その無念さは、たとえようもなかった（ibid.94-95）。

意図したことではないとしても、結果として、その中央化、商業化、風俗化に加担してしまった無念さを、ぼくは忘れるわけにはいかない。あの時、ドロンコになって走りまわっていたぼくらの思いは、そんな小さなものではなかった。……無念であった。悲惨であった。無力であった。それでもなんとかしたくて、ぼくらは、フィールド・フォークを始める（ibid.147）。

「フィールド・フォーク」とは、「もともと歌は、大地のうえにあったはずだ、フォーク・ソングを大地の上でうたおう」という呼びかけから始まった運動で、最初の「フィールド・フォーク」には、「アンチ・フォーク・ジャンボリー」というサブタイトルがついており、3回目の「フォーク・ジャンボリー」の2ヵ月前、1971年6月に開かれた。瀬戸市の美夜之窯で陶器を作ったり、岐阜県付知の杣工房で木の玩具を作ったり、付知川を下ったり、山に登ったりしながら、その現場でコンサートを開くという、歌と遊びと物作りを一緒にした4日間のイベントだった。

フォーク・ソングが大ブームを迎え、吉田拓郎や井上陽水が年商10数億円というメジャーになっていくのと逆行するように、笠木は自問自答を繰り返しながら「フィールド・フォーク」運動に没頭していく。

どうしたら人間らしく生きていけるのだろう。……なにを、どううたおうと、自らの生活を具体的に変えていかないかぎり、空しいばかりだろう。フォーク・ソングがあって生活があるのではない、生活があってフォーク・ソングがあるのだ。人間らしくなるのにはなにをしたらいいのか。どうもこの現代社会のあり方の反対をやるよりないのではないか（ibid.157）。

この「フィールド・フォーク」の理念を体現すべく、自分たちで自分たちの作った歌を歌うグループとして1970年12月に結成したのが「我夢土下座（かむとげざ）」である。そして翌年6月の「アンチ・フォーク・ジャンボリー」で初ステージを踏むことになり、直前になってなんとか4曲を準備するが、その中に、子どもの頃に口ずさんだわらべうたのエッチな替え唄「さよなら三角」や、黒人霊歌「山の上で語ろう [Go Tell It On The Mountain]」を意訳した「どうでもいい節」が含まれていた。

いちりっとランラン　らっきょ食ってシッシッ／しんがらもっちゃキャッキャッ　キャベツでホイ／さよなら三角　また来て四角／四角はとうふ　とうふは白い／白いはうさぎ　うさぎははねる／はねるはカエル　カエルは青い／青いはバナナ　バナナはむける／むけるは……　……は長い／長いはエントツ　エントツは黒い／黒いはインド人　インド人は強い／強いは金時　金時は赤い／赤いはざくろ　ざくろは割れる／割れるは……　アホーリャ／いちりとランラン　らっきょ食ってシッシッ／しんがらもっちゃキャッキャッ　キャベツでホイ」（笠木 1983：47-48）

ゆこうはるかなあの山へ／どこでもいいけど　どうでもいいけど／ゆこうはるかなあの山へ　ころがるぼくら　おお／／ころがるおいらはどこへ行く　俺の人生は／流れ流れてどこへ行く　やつの人生は／／金をかせぐは何のため　俺の人生は／食うだけが目当なら　やつの人生は／助けて神さま御岳山／どこでもいいけど　どうでもいいけど／助けて神さま御岳山　ころがるぼくらおお……（ibid.46-47）。

以上のように、笠木が始めた「フィールド・フォーク」運動の草創期から、替え唄や春歌は重要なレパートリーだったのである。

6. フォーク・ソングとしての替え唄との出会い

1971年以降、「我夢土下座」として笠木は全国各地でコンサートを行う。1985年以降は「フォークス」として、91年からはソロで活動する一方、「F・F・Cユニオン」を結成し全国各地で自立的にフィールド・フォーク運動を実践する個人やグループのゆるやかなネットワーク化を図った。その理念は1994年結成の「雑花塾（ざっか）」に引き継がれ、笠木は全国各地に散在する「雑花塾」のメンバーと各地でコンサートを行なった。

と同時に彼は、行く先々でその土地に伝わる民謡を尋ねて歩いた。その中で、時代や風土やそこに生きる無名の人びとの想いを刻みこんだ「民衆の唄（フォーク・ソング）」としての替え唄が、アメリカだけでなく日本各地にもかつて存在していたことを、そして今なお息づいていることを発見する。以下、具体例として4つの唄を紹介する。

「民権数え唄」

明治の自由民権運動の思想家、植木枝盛の作と伝えられる。

一つとせ　人の上には人ぞなき　権利にかわりがないからは　コノ人じゃもの
二つとせ　二つとはないわが命　捨てても自由のためならば　コノいとやせぬ
三つとせ　民権自由の世の中に　まだ目のさめない人がいる　コノあわれさよ
四つとせ　世の中開けゆくそのはやさ　親が子どもにおしえられ　コノかなしさよ
（後略）　（笠木1998：203）

このあと20番まで続く。曲は千葉県銚子の民謡「大漁節」で、「この、最初の、日本のフリーダム・ソングとも言うべき歌が、民謡の替え歌であることが、フォーク・ソングをうたってきた一人として、ぼくには、何より嬉しい」（ibid.204）。また、自由民権歌の流れをくみ、壮士演歌の始まりであり、日本のプロテスト・ソングの始まりでもある「ダイナマイトドン節」は、自由党の大井憲三郎の作だと言われるが、曲は土佐のヨサコイ節から出たものだろうと笠木は見なしている（ibid.205）。

「富の鎖」

1904年12月8日の「平民新聞」に発表。日本最初の社会主義の歌で、作詞者は不詳。

富の鎖を解きすてて　自由の国に入るは今／正しき清き美しき　友よ手を取り立つは今
我身は常に大道の　ソーシアリズムに捧げつつ／励むわ（ママ）近き今日の業　望むわ（ママ）遠き世の光
（後略）　（ibid.265）

元歌は軍歌「日本海軍」。大和田建樹作詞・小山作之助作曲。この曲は後年、子どもたちの替え唄「ぼくは軍人大きらい」になる。そして、1910年の大逆事件で死刑判決を受けて処刑された幸徳秋水が、1905年にアメリカ合衆国へ渡った際、サンフランシスコの日本人移民400人に行なった演説会の中でこの「富の鎖」を歌った可能性が高いと笠木は記す。「日本替歌（ママ）史上、燦然と輝く名曲ともいえるだろう。この替歌だったことが、ぼくには嬉しい。フォーク・ソングは替歌の歴史でもある

のだ」(ibid.264)。

「ホレホレ節」

ハワイの日系移民たちが歌ったうたで、「ホレホレ」とは砂糖きびの葉をむしり取る作業のこと。

行こかメリケン　帰ろかジャパン／ここが思案の　ハワイ国
ハワイハワイと　夢見て来たが／流す涙は　キビの中
ホノム極楽　パパイコウ地獄／ヒロのワイアケア　人殺し
カネはカチケン　わしゃホレホレよ／汗と涙の　共かせぎ (ibid.268-269)

「カチケンは砂糖きび刈り、カネは夫のこと、ホノム、パパイコウ、ヒロ、ワイアケアは、いずれもハワイ島の地名で、プランテーションのあったところ。ハワイ島のヒロ地区は、雨が多く、労働条件は苛酷で、日本移民労働者のストライキがたびたび起こっている」(ibid.269)。

このうたの元唄となったのは広島県の瀬戸内の漁師が歌っていた櫓漕ぎ唄と推測される。日本人のハワイ移民は1868年から始まり、1885年から本格化し1894年までの官約移民時代に29,000人に達する。そして移民禁止令の出る1924年までに38万人を超える人たちがハワイへ渡っていったが、内訳で最も多いのが広島県5万人、ついで山口県4.5万人だったため、広島方言がハワイでの日本語になっていく。そうした事情も、「ホレホレ節」のルーツが広島県の民謡にあるという推測の根拠となっているようだ(ibid.270)。

「黒だんど節」

鹿児島県奄美大島の島唄のひとつに、奄美の人なら誰でも歌えるという「黒だんど節」がある。この曲に乗せて、名瀬市の女性が学徒動員で行った長崎での原爆体験を歌っていることを笠木は知る。

忘れなりゅんにや　昭和二〇年ぬ／原子爆弾ぬ　忘れなりゅんりや
勝ちぬなりゅんにや　原子爆弾に／竹槍むけたとて　勝ちぬなりゅんにや

以前からある伝統的な歌詞に、この詩が加わって、これが、現代の黒だんど節。島唄は、民謡だが、でも、それは、昔の歌ではなく、新しい歌詞がつけ加えられ、歌い方も変化していく、現代に生きている民謡なのだ。……この歌が、フォーク・ソングであり、現代の民謡となった原爆のうただ。専門家がつくったものでもなく、プロの歌手がうたったものでもなく、民衆が生みだした原爆のうたを聞いて、ぼくは、喝采を送った(ibid.114)。

7. 戦後50年とCDブックスの制作

商業主義やマスメディアに背を向けた岐阜・中津川在住のフォーク歌手としての姿勢を貫き通した笠木だが、1975年頃から岐阜放送のラジオ深夜番組を担当し、1983年9月、安達元彦、木村快と

の共著『ただうたいたいためだけに　うたうのではない』（同時代社）を、1985 年 10 月に単著『わが大地のうた』（あけび書房）を出版する一方、1986 年 7 月には NHK 教育テレビ「人間いきいき」に出演し全国放映されるなど、彼の名前は東海地方を中心に、次第に知られるようになっていく。

また、笠木の活動は次第に社会性を帯びたものになっていった。岐阜県長良川河口堰反対運動支援コンサート「どてこん長良川 '79」（1979 年）や、山口県・祝島の原発誘致反対運動支援コンサート（1988 年）をはじめ、この時期、全国各地で発生していた原発誘致問題や米軍基地（反戦平和）問題、環境破壊問題などにおける少数者・弱者の立場に置かれた地元住民を、歌や遊びやもの作りといった「文化の力」を通じて支援する活動を展開していく。

こうした硬派の活動と並行して笠木は、1991 ～ 1992 年頃に日本春歌学会を設立し、京都をはじめ各地で春歌コンサートの公演を行う。彼が起草した同学会の以下の規約は、パロディ精神の発露を示すと同時に、彼の中で、春歌の称揚が日本国憲法 9 条の擁護と表裏一体のものであったことを端的に示す。「性交推奨、男女の性交権の保障　1. 春歌学会は、チンコ・マンコを基調とした男女関係を誠実に希求し、男根の使用または女陰の行使は、夫婦、恋人関係の問題を解決する手段としては永久にこれを支持するものである。2. 前項の目的を達するため、あの手この手、其の他のテクニックを春歌学会は伝授する。男女の性交権は完全に保障する」。

1995 年 7 月、笠木は CD ブックス『昨日生れたブタの子が　戦争中の子どものうた』を刊行する。少し長くなるが、その「はじめに」と「おわりに」を引用しておこう。

今年、一九九五年は、日清戦争後百年、十五年戦争後五十年です。日清戦争後五十年は、日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争、太平洋戦争と、戦争につぐ戦争の時代でした。この十五年戦争後五十年は、あやうくはあったけど、平和の時代でした。さて、これからの五十年、この国は、どんな時代を歩むのでしょう。今の子どもたちは、平和とともに生きて行くことができるのでしょうか。

戦争を語ることはむづかしい。「戦争なんて、やったものでないと分るもんか」と、戦争を体験したものは、その体験が悲惨で残酷で、非人間的であればあるほど、口を閉ざしてしまうのです。やっとの思いで口をひらいても、「そんなことは、あり得ない」、などと言われ、いくら言っても、分ってはもらえないと、絶望してしまうのです。だが、その沈黙が、その本心が、「分ってほしい」、からだとしたら、ぼくらは何をしたらいいのだろう。

百聞は一見に如かず、どんなことでも体験がもとで、体験から学ぶのですが、戦争だけは、体験してからでは遅いのです。体験してはいけないことを、体験せずに、体験したと同じほどに分るためには、何をしたらいいのだろう。戦争を防ぐには、戦争を知り、戦争を伝えていくことしかないのです。「忘れないこと」が、ぼくら弱い立場の人間たちに出来る、たったひとつのことだとしたら、それが、どれほど困難なことであっても、戦争よりはいいのです。ここにある替歌を、家族や学校で、大きな声でうたってみると、戦争を語り、伝えていく糸口が見つかるかもしれません。笑いころげながら、戦争が見えてくるかも知れません。

これからの五十年、子どもたちは、平和とともに生きていくことが出来るのでしょうか。平和でなければ、なんとしても、平和でなければ、と祈るような気持で、この百年を、あの戦争をふり返ってみたのです。このささやかな CD ブックスが、平和に生きる知恵と決意を、それぞれが、

それぞれの手に、しっかりと握りしめるために、ほんの少しでも役に立てば、どんなにいいだろうと思っています（「はじめに」より）。

軍歌をうたわされた、当時青年だった人たちも、替歌をこっそり、時には大きな声でうたっていた当時少年だった人たちも、戦後生まれの、今はもう人の子の親になった、戦争を知らない子どもたちも、その子どもである、今の子どもたちも、ここに収録した替歌を、みんなで、大きな声でうたってみてほしいのです。きっと、これらの歌の底に流れる、人間らしい思いや心を感じとっていただけることでしょう。どこにも戦争反対といった言葉は出てきませんが、ぼくは、これらの歌を、今の子どもたちにうたってやることが、戦争を伝え、戦争反対につながる、ささやかではあっても、ぼくらに出来る、人間としての仕事だと思っているのです。

これらの替歌をうたいはじめると、全国のどこの子どもたちも、間髪を入れず、瞬時に反応し、笑いころげたり、ヤジをとばしたりします。五十年の時差などどこにもありません。アゼンとして、とまどったり、無反応だったりするのは大人ばかり。頭で分かろうとするからでしょう。誰でも子どもの頃があったはずです。子どもの頃にかえって、心と身体を思いっきり解放して、この替歌をうたってみて下さい。底ぬけにおかしくて、とめどなく悲しいことでしょう。家族や学校で、笑ったり泣いたりしながら、戦争について語りあえたら、どんなにいいだろう、と思っています。あの戦争中に、子どもたちが、こんな替歌を作っていたことが信じられない、という意見がありました。うたっていたぼくも信じられないのですが、これはぼくの創作ではありません。当時の子どもたちの誰かが作って、口から口へ伝っていったものばかりです。

大人たちが口をつぐんでいただけに、当時の子どもたちに、大きな拍手をおくってやりたいものです。でも、今の子どもたちも負けてはいません。湾岸戦争のとき、戦争のバカバカしさを、見事に表現した、「サザエさん」の替歌が生まれました[12]。また、この春、愛知県のある幼稚園では、こんな替歌が――となりのじっちゃんばっちゃん／イモ食ってへこいて／パンツが破れて死んじゃった(ママ)へ――　子どもたちに問題はありません。あるとしたら大人たちのほうでしょう。平和と自由を求めて、この国の人々は、どう闘ってきたのか、そのルーツを、この百年で見ながら、戦争と戦後五十年をふりかえってみたのです（「おわりに」より、改行箇所を一部変更）。

同書に続いて、1996年7月に『君よ五月の風になれ　－日本国憲法50年－』を、1999年9月に『鳥よ鳥よ青い鳥よ　－日本の侵略と韓国の抵抗のうた－』を刊行し、CDブックス3部作を完結させた。ちなみに、『鳥よ～』にも3曲（「少年行進曲」「蜂起歌」「独立軍歌」）の替え唄が含まれている[13]。

8. 憲法フォーク・ジャンボリーの開催とCD文庫の制作

2005年からは憲法9条を守る活動を展開、東京で「憲法フォーク・ジャンボリー」を開き、音楽仲間に護憲グループの結成を呼びかけた。そして2010年からCD文庫の自主制作を開始し、2014年の逝去までにvol.8まで発行した（笠木の死後、vol.9と10が発行されて完結する）。このCD文庫発行の動機を笠木は次のように記している。

いま、いよいよ電子書籍の時代となり、読みたい本は、ボタンひとつで、iPad にダウンロードして、いつでも読めるようになってきました。レコードは売れず、本は消えていく、そんな時代に、私たちはこの CD 文庫を発行しようというのですから、こんな無茶、無謀はありません。なんというアホか。でも、そう思うあなたにこそ、この CD 文庫を開き、読んでいただきたいと思うのです。

人間らしく生きるために必要なものは、いつも手もとにおき、目につくところにはっておかなければいけないのではないか。くりかえし読み、くりかえし見つめることが、人間というこの未熟で、未完成で、いつも間違える生き物には、必要なことではないか。それは電子書籍には不可能だろう。そう信じたくて、このシリーズを始めたのです（笠木 2010：9）。

シリーズのテーマは、発行順に「日本国憲法」「韓国併合 100 年」「大逆事件 100 年」「非暴力」「東日本大震災」（2 回）「田中正造没後 100 年」「平和の暦（Peace Almanac）」と、まさに直球勝負で、笠木の人生の集大成の観がある。これをほぼ半年に 1 冊（1 枚）のペースで発行し、その合間を縫って全国各地でコンサート活動、さらには東日本大震災の後、いわき雑魚塾の CD 文庫「でれすけ原発」のプロデュースも行うなど、最期の 5 年間、いのちの灯りをひときわ明るく輝かせた。

おわりに　―いのちの讃歌、平和への祈り―

亡くなる数ヶ月前、笠木は戦争中の子どもの替え唄の意義について次のように著している。

どんなに暗く、厳しい時代でも、名もない人びとは歌をうたってきたのである。つらく厳しいからこそ、人びとや、その子どもたちは、生きるために必要な歌をうたってきた。詞を替え、心にふれる曲に乗せて、隠れて本音をうたってきた。私はその歌を、戦争中のフォークソングだと思っている。人びとの歌である。いつの時代でも、人びとは、歌などなくても死ぬことはないが、歌がなければ、人間らしく生きてはいけないのだ（笠木 2014：74）。

戦争中に歌われた子どもの替え唄、それは「子どもはかくあるべし」という親や教師や大人社会の権力行使に対する、子どもたちの無意識のうちの抵抗であり、逆襲であり、自由の主張だったと笠木は見ていた。それはまた、「自分はなぜうたを歌うのか」に対する彼なりの答えでもあった気がする。つまり、有無を言わせず自分たちを支配し管理しようとする大きな力（権力）に対して抗い、自分は自分らしくありたい、人間らしく生きたいと、自由を求めて主張すること、それが彼にとってのうたを歌うことの意味だったのではないか。そしてその生真面目な主張に、ユーモア（笑い）のエッセンスを加えるところが、子どもの替え唄から学んだ笠木のバランス感覚だったと思われる。

それでは、「自分らしくあること、人間らしく生きること」とは具体的には何か。笠木の生涯を辿ってきた今、浮かび上がってくるのは 2 つの信条、人間だけでなく森羅万象に向けての「いのちの讃歌」であり、それから、どんなことがあっても戦争だけはしてはいけないという「平和への祈り」である。この 2 点において、笠木の全生涯は戦争中の子どもの替え唄とピタリと重なる。

このような彼の想いをしかと受けとめ、次の世代へと語り継ぎ、歌い継いでいくことこそ、遺さ

れた者の使命ではなかろうか。

これがすべての終りとしても　　明日があるなら自由を求め
自由を求めて歩きつづける　　たとえ路上に行き倒れても
行き倒れたわたしをこえて　　君は行くだろう　あゝこの国で
……

（笠木「これがすべての終りとしても」、笠木 1985b：166）

注

1）子どもの文化研究所『子どもの文化　2014 7+8』（2014/08）「特集　うたと語りと声」に、論考「戦時下の子どもがうたった歌」をご寄稿いただいた。

2）『ただうたいたいためだけに　うたうのではない』（安達元彦、木村快との共著）1983、『わが大地のうた』1985、『修羅のデュエット』（島田豊との共著）1987、『青年よ　心のパンツをぬげ』1988、『私に人生と言えるものがあるなら』1998。

3）『昨日生れたブタの子が　戦争中の子どものうた』1995、『君よ五月の風になれ－日本国憲法 50 年－』1996、『鳥よ鳥よ青い鳥よ　日本の侵略と韓国の抵抗のうた』1999。

4）笠木透と雑花塾（以下同じ）『vol.1　みんな生きている海 －日本国憲法第 104 条－』WFU（Wild Flower Union）2010、『vol.2　ホウセン花 －韓国併合 100 年－』WFU2010、『vol.3　ポスター －大逆事件 100 年－』WFU2011、『vol.4　非暴力 －愛するもののために－』WFU2011、『vol.5　私の子どもたちへ －東日本大震災－』WFU2012、『vol.6　豊かな青い海 －東日本大震災 2 －』WFU2013、『vol.7　われここにあり －田中正造没後 100 年－』WFU2013、『vol.8　平和の暦 － Peace Almanac Singers －』WFU2014。尚、笠木の死後『vol.9　君が明日に生きる子どもなら －不戦 70 年－』WFU2015、『vol.10　これがすべての終りとしても －笠木透と雑花塾 FINAL －』WFU2016 が発売され、全 10 部作となった。

5）2017 年 4 月 22 日、岐阜県中津川市の笠木の自宅で、お二人にインタビューを行った。

6）笠木のこうした生活綴方教育批判は、1950 年代後半以降に展開された、松本利昭の主体的児童詩や「たいなあ方式」、竹中郁の児童詩雑誌「きりん」、そして鹿島和夫の「あのねちょう」の教育実践に共通して見られる「想像力」や「ユーモア精神」の尊重にも相通じるものがある。

7）公演日・会場・公演団体名に関する情報は、研究代表者・東谷譲「研究成果報告書 地域共同体の文化実践の担い手としての小学校教員に関する文化社会学的研究」（科学研究費助成事業　研究課題番号 23653275 2015 年 3 月）に収載された「中津川労音」（中津川労音機関誌）1966 年 5 月号（No.24）に拠る。

8）出典は注 7 に同じ。

9）写真家木之下晃のブログに、「1967 年 10 月 5 日名古屋市公会堂」とキャプションの附いたピート・シーガーの演奏する写真が掲載されており、この日か、複数回の公演があった場合にはその前後の日に笠木も聴きに行っていた可能性が高い。尚、この情報は名古屋市公会堂館長・藁谷はるか氏のご教示によるものである。謝意を表したい。

10）笠木透のエッセイ「ルーウィン・ディヴィス（ディヴ・ヴァン・ロック）　時代は 1961 年の頃」（2014/06/13 記）より。

11）「ベトナムに平和を！市民連合」の略。昭和 40 年（1965）小田実・鶴見俊輔・開高健らを中心に結成。広範な市民の自発的参加を得て、街頭デモ・反戦広告・支援カンパなど多様な反戦運動を展開した。昭和 49 年（1974）に解散（「デジタル大辞泉」より）。

12）「戦争しようと　町まで出かけたら／戦車を忘れて　三輪車で突撃／相手はマシンガン　こっちは水鉄砲／ルールルルルー　結局負けちゃった」

13）但し厳密に言えば、「少年行進曲」は安昌浩の作詞であり、作者不詳の「替え唄」ではない。

＜引用・参考文献＞

・笠木透 1983『ただうたいたいためだけにうたうのではない』（安達元彦、木村快との共著）同時代社
・同　1985a『わが大地のうた』あけび書房

・同　1985b『笠木透詩集　わたしの子どもたちへ』径書房
・同　1987『修羅のデュエット』（島田豊との共著）愛知書房
・同　1988『青年よ　心のパンツをぬげ』エフエー出版
・同　1995『昨日生れたブタの子が　戦争中の子どものうた』音楽センター、あけび書房
・同　1996『君よ五月の風になれ－日本国憲法 50 年－』音楽センター
・同　1998『私に人生と言えるものがあるなら』萌文社
・同　1999『鳥よ鳥よ青い鳥よ　日本の侵略と韓国の抵抗のうた』音楽センター、たかの書房
・同　2014「戦時下の子どもがうたった歌―『海にカバ　山にカバ』」、子どもの文化研究所『子どもの文化 2014 7+8』所収
・笠木透と雑花塾 2010『みんな生きている海 －日本国憲法第 104 条－』WFU
・研究代表者・東谷譲 2015「研究成果報告書 地域共同体の文化実践の担い手としての小学校教員に関する文化社会学的研究」（科学研究費助成事業　研究課題番号 23653275）

（本学文学部教授）

［笠木透　年譜］

西暦	履歴	社会の出来事
1937 年	11 月 2 日、岐阜県恵那郡岩村町に生まれる。父は出征中。	日中戦争（十五年戦争）始まる。
1945 年	国民学校 2 年生で敗戦を迎える。	8 月 15 日、アジア太平洋戦争（十五年戦争）終結。
1946 年		11 月 3 日、日本国憲法公布。翌年 5 月 3 日施行。
1953 年	4 月、岩村高等学校入学。古きよきアカデミズムとバンカラが残る校風。同級生の影響で過激な唯物論者に。	
1956 年	3 月、岩村高等学校卒業。4 月、岐阜大学学芸学部入学。社研（社会科学研究会）に所属。砂川基地拡張反対闘争に参加。	
1957 年	社研の部長に。僻地教育の研究のためメンバーと岐阜県高根村野麦郷を訪れ、村の人たちと交流。	
1960 年	安保闘争に参加し、１年留年する。結核を患う。結婚。	1 月 19 日、日米安全保障条約（新安保）の締結。6 月 23 日発効。
1961 年	岐阜大学学芸学部卒業。岩村町の小学校で町費の臨時教員。	
1963 年	東京の教育関係の出版社に就職し、事典や図鑑のセールスを研修の後、名古屋支社勤務となる。	10 月、義兄（姉の夫）近藤武典が中心となり中津川労音（中津川勤労者音楽協議会）を結成。
1964 年	出版社を退職し、中津川で父親と一緒に出版社の代理店を開く。仕事の傍ら、労音の手伝いを始める。	
1965 年	代理店をやめ、労音の仕事（イベントの企画等）に専念。	
1966 年	文工隊「ぜんまい座」を結成。中津川周辺を皮切りに民謡調査を行う。	7 月、ベトナム中央舞踏団が名古屋公演を行う。
1967 年	10 月、名古屋でピート・シーガーのコンサートを聴く。11 月、労音で高石ともやのコンサートを開く。その前座で「ぜんまい座」として民謡「音頭与三郎」を歌う。	
1969 年	8 月 9-10 日、坂下町（現中津川市）椛の湖畔にて「全日本フォーク・ジャンボリー」を企画・開催。観客 2500 人。	8 月（「全日本フォークジャンボリー」の 1 週間後）、米国ウッドストックでベトナム反戦コンサート、観客 30 万人。
1970 年	8 月 8-9 日「第 2 回全日本フォーク・ジャンボリー」開催。観客 8000 人。12 月、フォーク・グループ「我夢土下座（カムトゲザ）」を結成。	70 年安保、学生運動。
1971 年	6 月「アンチ・フォーク・ジャンボリー　フィールド・フォーク・ムーヴメント」を開催。我夢土下座も出演し「音頭与三郎」「さよなら三角」等、4 曲歌う。8 月 7-9 日「第 3 回全日本フォーク・ジャンボリー」開催。観客 3 万人超。「私に人生と言えるものがあるなら」発表。	
1972 年	坂下町の農村舞台・新盛座でコンサートを始める。「私の子どもたちへ」（最初のタイトルは「父さんの子守歌」）発表。	
1973 年	恵那山の山頂でコンサート（「恵那山奉納野宿大音楽会」）開催。	
1975 年	ハンググライダーを始める。この頃から岐阜放送の深夜番組で DJ を始める。	
1976 年	1 月、近藤武典死去。この頃『パパラギ』に出会う。	
1978 年	12 月、ハワイ旅行。	
1981 年	安達元彦と「パパラギ・ソング」を作る。	
1982 年	4 月以降、安達元彦と全国各地を自転車で回る「自転車コンサート」を開催。	
1983 年	9 月、安達元彦、木村快との共著『ただうたいたいためだけに　うたうのではない』（同時代社）を出版。	
1985 年	フォークス結成、10 月『わが大地のうた』（あけび書房）を出版。	
1986 年	NHK 教育テレビ「人間いきいき」に出演し 7 月 4 日全国放映。	
1987 年	12 月、島田豊との講演・対談録『修羅のデュエット』（愛知書房）を出版。	
1988 年	12 月、『人間再発見の旅　青年よ　心のパンツをぬげ』（エフエー出版）を出版。	
1991 年	F・F・C ユニオン結成。	
1994 年	雑花塾結成。	
1995 年	7 月『昨日生れたブタの子が　戦争中の子どものうた』（音楽センター、あけび書房）を出版。	日清戦争後百年、十五年戦争後五十年。9 月、沖縄で米兵少女暴行事件。
1996 年	7 月『君よ五月の風になれ－日本国憲法 50 年－』（音楽センター）を出版。	
1998 年	7 月、『私に人生と言えるものがあるなら』（萌文社）を出版。	
1999 年	8 月、『鳥よ鳥よ青い鳥よ　日本の侵略と韓国の抵抗のうた』（音楽センター、たかの書房）を出版。	
2005 年	東京・石川・広島・京都他、全国各地で憲法フォーク・ジャンボリーを展開。	
2010 年	6 月、『CD 文庫 vol.1　みんな生きている海 －日本国憲法第 104 条－』WFU (Wild Flower Union) 発売。	
2011 年	東日本大震災のうたづくりに取り組む。	3 月 11 日、東日本大震災、福島第一原発事故発生。
2014 年	「戦時下の子どもがうたった歌」を『子どもの文化』2014 年 7＋ 8 月号に寄稿。12 月 22 日、直腸癌により死去。	
2016 年	12 月、『CD 文庫 vol.10　これがすべての終りとしても－笠木透と雑花塾 FINAL －』発売（CD 文庫シリーズ完結）	